

# 平成28年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

高校生の部 最優秀賞

正義と現実の間

暁星高等学校 1年 佐々木 保明

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行 いくら言葉巧みに弁解が立っても正義は許さんぞ

先に読んだ谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」の中に、「夏目漱石が『草枕』の中で羊羹の色を讚美していた、と書かれていたことを思い出した。それで、その『草枕』を羊羹の描写を探しながら読み始めた。そこで私はこの一行に出会った。

「屍骸」、「解剖」それまでの詩的な表現とは打って変わった不気味な単語が表れ、私ははっとした。しかし、内容を理解すると、これらを敢えて使った漱石の意図が見えた。

『草枕』は、画工である主人公が、春の山を登りながら思いにふける場面から始まる。その考えにふけっている内容が、漱石自身の人生や芸術に対する考え方だと思え、興味深い。彼は、この世の中を住みにくいと感じる。しかし人間である以上ここで生きていくしかないし、そうであれば、少しでもくつろげて住みやすいようにしようと思う。そこに芸術の必要性を認め、美を追求し、非人情の旅に出る。どのようにそれを遂行しようとしているかという点、第三者の視点を持つとうと努力することである。主人公によれば、苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりするのが人情である。そういった感情を一步引いた位置から眺めるのが非人情である。これがなかなか難しい。それが、選んだ一行の「詩人とは自分の屍骸を、自分で解剖して、その病状を天下に発表する」ということだろう。非人情とは、まさに、自分の心にメスを入れるように困難なことなのだ。

一步引いた視点を持つために具体的にどうすればよいのかという方法が書かれている。「何でも蚊でも手当たり次第第十七字にまとめてみるのが一番いい」という。すると、その十七字を考える間に、例えば自分の腹立たしさも他人に変じているという。日々の生活のなかで、ちよつと困ったとき、一句を考える。

「蟬の声原稿用紙に汗落ちる」

なるほど、少し冷静になれる。苦しい場面が詩的になった。十七字に表すことは、自分の感情からいったん離れて、状況を俯瞰することにもなるのだ。

ところで、この作品を読むきっかけとなった羊羹についてはおおよそ八行にわたり美しい描写が続く。実はこの羊羹、主人公が気になってくる女が部屋に持つてくるのである。一步進んでしまいそうな女への気持ちや落ち着かせるため、ここまで羊羹に気持ちを向けているのではないかと思った。人は人であるがゆえに、努力をしても人情から離れられないときもあるのかもしれない。

「われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも詠まれる。」春の雨に濡れながら山道を行く主人公が語る。まだ中学生の自分が、これからの人生で困難な場面であったとき、「自分の屍骸を、自分で解剖する」と漱石が表したように、第三者の視点を思い出すことができれば、何とか試練を乗り越えることができるだろう。そんな生き方のヒントを、私はこの一行から学んだ。